

7月11日は世界人口デー

小池誠一 (IGNITE 機構)

1987年7月11日にユーゴスラビア(当時)で人口50億人目の赤ちゃんが生まれ世界中で大きな話題となりました。これを記念するとともに世界の人口問題への意識を高めるために1989年より7月11日を世界人口デーとして制定することが国連で決議されました。これに合わせるためかも知れませんが、毎年6月になると世界人口デーを前に国連各機関より人口データの年次改訂や関係の報告書が発表されます。今年も6月30日には世界人口基金(UNFPA)より「世界人口白書2020」が発表されました。世界人口デー制定の趣旨も踏まえ人口問題にまつわる話題をあれこれ話したいと思います。

まず、世界の総人口ですが2020年の総人口は77億9500万人、前年比8000万人増です(人口白書2020)。50億人目の赤ちゃん誕生から33年で23億人増加しました。最近引退したお笑い芸人のブルゾンちえみさんが地球上の人口の半分は男というネタの「35億(ーあと5000万)」がブレイクし、2017年の流行語にノミネートされました。ネタを作ったのはもう少し前でしょうが、皆さんの中にはこのネタで世界人口を2倍の71億と覚えた人もいますので、その方は78億とデータのアップデートをして下さい。

今後のトレンドについてですが、国連の人口局が「世界人口推計(World Population Prospect)」という報告書を発表します。原稿執筆時点では2020年版が未発表なので昨年6月に発表された2019年版をもとにすると2050年に97億人、2100年に110億人に増加すると予測されています。世界の人口問題は増える話ばかりが強調されますが、同報告書によると1人の女性が生涯に産むと見込まれる子どもの数の平均値である合計特殊出生率(TFR; Total Fertility Rate)は1990年の3.2から2019年は2.5に減少。2050年には2.2まで下がるとの予測です。このことから人口増は続きますが人口増加率はブレーキがかかってきました。なお、皆さんはTFRが2.1を切ると人口が維持できないということは知っていると思います。

増える話と減る話を一緒にするとイメージが混乱し、また、現実の社会の様態が見えなくなります。もう少し詳しく見ると理解が深まります。人口の増減を決めるのは出生数と死亡数です。今後出生数にブレーキがかかっても平均寿命が伸びることで死亡する割合が減少することも予想され、出生数の減少を一部相殺します。また、報告書の中で増える国と増えない国(減る国)が明確になり(2極化が進み)、2050年までの世界人口の増加分の半分以上がインド、ナイジェリア、パキスタン、コンゴ民主共和国、エチオピア、タンザニア、インドネシア、エジプト、米国の9ヶ国に集中するとしています。他方で世界最大の人口で有する中国の国家統計局は今年の1月に2019年末の人口が14億を超えた(14億5万人)と発表しましたが、世界人口推計では中国は2019年から2050年までに約3140万人減少し、2.2%の人口減少が予測しています。日本の社会問題で皆さんがよく耳にする少子高齢化問題は中国において、今後大きなマグニチュードで現れ、国家運営上の大きなリスクの一つになるといわれており、上手にマネージできないと、その影響は国内に留まらず近隣の日本や世界に及ぶ可能性もあります。なお、世界の総人口では無視できますが、国別の人口を考える時は人の移動による増減要因が加わります。移民問題は今後の国際社会においてもまた各国の国内問題としても重要な課題になります。

皆さんは日本の人口の数値と世界で何番目に多いか知っていますか。人口白書(2020)では1億2650万人という数値が出されています。世界人口推計(2019改訂版)では2019年の日本の人口は1億2686万人となっており、減少の規模がわかります。日本の人口減少は2010年から既に始まっていますが2019年は私には少し特別な思いがありました。日本の人口は2002年に世界9位から10位になってからずっと10位が続き、日本の世界人口ランキングはと問われると10位と反射的に答えが出ます。数年前から11位のメキシコにそろそろ抜かれるだろうと覚悟していましたが2019年にメキシコが正式に10位となり、日本の10位は結果的には17年間で終わりました。人口に順位をつけることに意味はないと思いますが、ランキングのTOP10から落ちたというやはり淋しい気持ちになります。これまでは日本の後に続くメキシコを意識していましたが、これからは

日本の後に続く 12 位のエチオピアが気になります。先に書いたようにエチオピアは今後人口の大きな増加が予定されている国の一つであり、日本が 11 位からさらに下がるのにはそれほど時間がかからないと思います。なお、世界人口推計報告書の中では日本は死亡数が出生数を上回る人口減少国として取り上げられていますが、今後は移民の流入で人口減少が相殺されるとの予測がされています。日本では政策的に移民という言葉は使いませんが、外国人受け入れに関する政策的な動きがあったことは皆さんご存知だと思います。移民の流入があるということは経済力、政治的安定、その他魅力がある国の証です。人口の自然減が進み、移民の流入もなければ人口減少が進みます。人口が減少しても技術や社会のイノベーションにより、生産性が高まり、また、社会機能が維持できればよいですが、それができないとその国は衰退に向かいます。今後、日本が生活するのに厳しい社会になれば日本から第三国への流出が起こる可能性もあります。日本の将来の姿はどうなっているのでしょうか。

国連機関の年次報告書の多くは統計数値の改定（最新データの提供）とともに毎年特定のテーマを取り上げメッセージを発信します。UNFPA の「世界人口白書 2020」の Web Site (<https://www.unfpa.org/swop>) に入ると思わずいってしまうイラストに“AGAINST MY WILL DEFYING THE PRACTICES THAT HARM WOMEN AND GIRLS AND UNDERMINE EQUALITY”という刺激の強い文字が目に飛び込んできます。今回は「平等をなし崩しにしている、意志に反して行われる女性や少女を害する悪しき慣習に立ち向かうという」テーマです。有害な慣習として、男児選好（生まれた子供が女兒とわかると遺棄や、育児放棄が行われること）、児童婚（18 才未満の少女が本人の意思に関係なく年の離れた男性と強制的に結婚させられること）、女性性器切除（FGM; Female Genital Mutilation、文字通りの行為）が取り上げられています。ここでは触れませんが、それぞれの数値や内容は世界の悲惨な現実を見てきた私も正直驚くものでした。

今回お伝えしたいと思ったのは、この報告書でコロナ(COVID-19)の影響に触れていたことです。この種報告書の完成直前にホットな話題を入れることは大変な作業であり関係者の苦労を察するとともに、このテーマに対する強い意志を感じます。コロナの世界的な拡大により、児童婚や FGM の増加すること、また、家族計画サービスにアクセスできないための望まない出産やジェンダーに基づく暴力は今後数か月で爆発的に増加することが予測され、何らかの被害を受ける女性が急増する可能性を伝えていきます。大きなリスクは社会の弱い部分に大きな負のインパクトとして顕在化することは、今回のコロナ禍と人口問題、女性問題についての関係でも当てはまるようです。

人口に話を戻しますが、皆さんは豊橋市の人口を知っていますか。今年の 6 月の数値は 37 万 6389 人です。朝の車通勤の間、エフエム豊橋を聞き流していると、毎月豊橋市の人口の最新データを伝えてくれるので自然と耳に入ります。年ごとの推移を市役所の WEB SITE の国勢調査のデータベースで見ると 2010 年が頂点で 37 万 6665 人。その後はほぼ横ばい（微減）となっています。エフエム豊橋の情報を聞いていると月の動き（前月比）がわかるのですが、毎月のように日本人は減少して、外国人が増えて結果、人口は現状維持か微減というのが一貫した傾向です。これは先に書きましたが、2010 年に日本の人口が減少に転じたこと、世界人口推計報告書において日本が人口の自然減が起こっても移民の流入でそれを相殺するという予測とぴったり重なっています。豊橋は日本の人口動態の代表というか平均的な姿なのかも知れません。ただ、今回カーラジオからエフエム豊橋の月別の人口情報が耳に入った瞬間にぎくりとしました。いつもと違う情報（刺激）に接すると人の体は反応してしまいます。今回は外国人が減少して日本人が増えたという、これまでになかったことが起きていました。やはりコロナの影響は大きく月別の短期的な推移のデータには即座に、かつ、具体的な数値で現れます。外国人の減少は政策的な措置の結果で一時的なものかも知れませんが日本人の増加は何が要因でどれだけ今後続くのか一過性のものなのか気になります。

人口という特定のテーマ一つとっても、マクロ（世界）、メゾ（日本）、ミクロ（豊橋）のデータ、長期予測と短期的な変動実績等を見比べると、見えてくるものもありますし、いろいろと考えてみたくもなります。また、コロナが社会に及ぼす影響の大きさを特定の側面からですが具体的に実感できると同時に、その長期的な影響がどうなのかも気になります。来年の世界人口デーの頃に再度各種の人口に関するデータを見直してみたいと思います。人それぞれ関心があるものは異なりますが、記念日というのは過去を振り返ったり、現状を見つめたり、将来に思いを馳せたりする良い機会になります。

（終わり）